

不動産業から茶道家への転身（日本文化に目覚めて）

於：在京会津高同窓会 平成 29 年 4 月 16 日

ご紹介に預かりました昭和 40 年卒の河野です。

司会の鈴木君のご紹介にありましたように、大学を卒業と同時に東急不動産に入社し 55 歳まで 33 年間勤めました。そのうち 25 年ほどは海外事業部門に籍を置き、11 年間は外地に駐在しました。国内勤務時も年平均 110 日ほど海外出張をしていましたので、不動産屋としては異色と言えらると思います。

およそ茶道と縁のない海外不動産を扱ってきた私がなぜこの道に入ったかをお話したいと思います。

茶道との最初の縁は母です。

若松の実家で母がお茶を教えていましたので、薄茶の飲み方は子供のころから知っていましたが、稽古をしたことはなく、又、したいとも思いませんでした。

その私が茶道に目覚めたのはロサンゼルス駐在時の 45 歳の時でした。

あるホテルのパーティーで会ったアメリカ人の証券マンが日本の歴史に興味を示し、話が弾みました。最初は歴史の流れやその時代の制度など一般的な内容だったのですが、彼は意外にも多くのことを知っており、だんだん質問の内容が専門的になりました。

日本史については大学入試の課目でもあり、時代小説や歴史書を沢山読んでいましたのでお手の物でしたが、

話が安土桃山時代の陶器や蒔絵・日本画のこととなると答えに窮することが多くなりました。

例えば陶器の土や釉薬のような専門的な質問です。

彼の知識の深さにすっかり舌を巻いて、「どうしてそんなに日本文化に詳しいのか？」と訪ねると、

彼はフロリダの大学で日本文化に触れて興味を持ち、日本についての課目を専修後、ロンドンに渡り日本学の修士号まで取ったというのです。

日本学の修士号と聞いて、私の知識が及ばないのは当然だ、と思いました。しかし、よくよく考えると彼は高々 5-6 年勉強したのに過ぎないのです。

その彼に日本人として生を受け、大学まで勉強しその後もずっと日本社会で生きてきた自分が、彼の知識に及ばないことに愕然とし、恥ずかしくなりました。

その時に思い出したのが、**茶道**でした。

茶道は日本の伝統文化の殆ど全てのもので繋がっていますので、伝統文化を学ぶベースキャンプになるのではないかと気づいたのです。

その直後に帰国したのですが、ひょんなことから知人の二家族を我家で接待し、私がお茶を点てることになりました。先に帰国し、お茶を始めていた家内に手ほどきを受け、又、招待日直前の週末には若松に戻り、2日間で同じ点前を12-3回も母に稽古してもらいました。

母の指導は厳しく指の先まで細かく注意され、こんなに細心の注意を払ってお茶を点てているのか、と驚くと共に感銘を受けました。

にわか仕込みでしたが、無事薄茶を点てて友人達を持成すことが出来ました。

このとき初めて、お茶をやろう、と決意したのです。

ここで茶道についてご説明します。

茶道の目的は「もてなし」です。

そのために炭を熾し、釜を掛けて湯を沸かし、床の間には軸を掛け、懐石料理を出し、その後に主菓子を出します。

ここで少し休憩の後、床の間の軸を花に替えてからメインの濃茶を出します。最後に干菓子と薄茶を差し上げます。

4時間ほどの日本古来の正式なおもてなしの方法で、茶事といいます。

今述べましたように抹茶には濃茶と薄茶がありますが、一般の人は濃茶を知らないと思います。

濃茶はドロツとしたお茶で、ココアよりもずっと濃厚です。この濃茶を飲むためには、胃を保護する目的で懐石料理を出します。

言ってみれば、懐石料理はメイン料理の濃茶の前のアピタイザーに過ぎないのです。その濃茶を飲むためのフルコースが茶事なのです。

茶道を学ぶ者はこのすべてをこなせるように日々稽古に励みます。

歴史的には、茶道の主役は男性、しかも指導者階級の男性です。

お茶が中国から日本に伝わったのは奈良時代以前ですが、歴史書に記録があるのは、奈良時代の「引茶の儀」というものです。

これは聖武天皇が宮中に百人の僧を召し大般若経を読経させ、その翌日に茶を飲ませたことです。

この頃の茶は今の抹茶とは違い、蒸した茶葉を団子状に固めて乾燥させたもので、飲むときにはそれを削ってから薬缶に入れ煮出したものを飲むものでした。現在の雲南餅茶と似た形です。

茶の木の栽培は栄西が宋より茶の実を持ち帰った鎌倉時代に始まります。栽培は平戸、博多、梅尾、宇治と伝わりその後日本各地へと広がりました。

茶を飲む風習は寺院に始まりそして帝に献上され、その後、殿上人の間に広まっています。

栄西が鎌倉で実朝に茶を点てるとともに「喫茶養生記」を献上しますと、関東武者にまで一気に広がりました。狭山茶の栽培はこの頃が始まりだそうです。

足利時代には連歌の会のお茶（濃茶）の産地当てを競う「闘茶」（闘う茶と書きます）が大流行しました。その「かけ」の代償として中国到来の宝物（掛軸や香炉・花入れ等）や荘園までが提供されました。参加者は公家や守護大名です。近江など五か国の守護で、生け花を創設したとされるバサラ大名、佐々木道誉はその代表格です。

その後、織田信長が茶の湯を政道に採り入れ、茶道具や茶会の開催権を家来への褒美としたことで、茶道の位置が武家儀礼となりました。信長配下のある大名は望んでいた茶入（濃茶の容器）ではなく下野の国を貰ったことを悔しがったという逸話もあるくらいです。茶入れが一国より価値があったということです。

秀吉はそれを受け継ぎ更に大々的に行いました。

純金づくりの茶室・茶道具での正親町天皇へ献茶したり

全国から茶人を集めた北野の大茶会を催したり、

小田原の北条攻めの時の箱根や、朝鮮出兵時の名護屋でも茶会をしました。

信長から秀吉の時代の代表的茶人が利休ですね。

その利休の子孫は表千家、裏千家、武者小路千家として今も続いています。

因みに私は裏千家に属しています。

先ほど茶入の価値が一国以上と言いましたが、茶道具が時の権力者たちに如何に珍重されていたか、いくつか例を挙げてご説明しましょう。

戦国時代後期、畿内（山城・大和・河内・和泉・摂津）一の実力大名・

松永弾正は織田信長に臣従するにあたって名物といわれた「九十九茄子」という銘の茶入れを献上しました。

それを喜んだ信長は松永に大和一国の領有を許しました。

その後、武田信玄の上洛に乗じて反旗を翻しましたが、信玄急死でやむなく信長に許しを乞います。その時には自分の居城・多門城と牧谿（南宋末の画僧）の煙寺晩鐘図（瀟湘八景図の一つ）を差し出し許されました。

その六年後、今度は上杉謙信上洛にあわせ再度反旗を翻しましたが、織田軍に包囲され落城寸前まで追い込まれます。その時、織田方からの使者が来て、弾正が一番大切にしていた「平蜘蛛」という銘の釜を差し出せば命を助けると言われます。しかし弾正はその平蜘蛛の釜に火薬を詰め天守閣に登り茶釜もろとも爆死してしまいました。

自分の命を投げ出しても信長には釜を与えたくなかったのですね。

九州の雄、大友宗麟は島津に圧迫されていた時、秀吉の助けを乞うために、秘蔵の茶壺「志賀の壺」を献上し、願いを聞き届けて貰いました。また、秀吉が大坂城に移った祝儀として玉礪（南宋～元代の画僧）筆の青楓の軸と、秀吉が望んだ名物茶入「新田肩衝」も譲り身の安全を図ったのです。

大阪冬の陣で大阪城は炎上しましたが、家康は家臣に命じ焼け跡を徹底的に探させ粉々になった九十九茄子を修復させました。前にお話した松永弾正から信長に渡り、秀吉が受け継いだ茶入れで、現在三菱グループの静嘉堂文庫美術館にありレントゲンで見ると破片を漆で接着した跡がはっきりとわかります。

さて徳川時代になると将軍を大名が自邸に招待する「お成り」の形式が確立しますが、その式例を完成させたのが、大名茶人の小堀遠州であり、片桐石州でした。遠州は利休の孫弟子です。

「お成り」を受ける大名は将軍の為に門を新築し（御成門）最高格式の玄関を供えた屋敷も建てその中に茶室も揃えました。将軍に出す料理は豪華なものが、基本的には茶席で出される懐石料理を基本としています。当然、濃茶と薄茶もふるまわれます。

そのために各大名家は茶の湯の専門家を常に雇っていました。肩書は「茶頭」或は「茶堂」といわれ武士扱いとされました。武士がそれを務めることも多かったのです。

お成りを受けた大名を見ますと、御三家を始め、加賀前田家、堀田正盛、土井利勝、井伊直孝、柳生宗矩、毛利秀元などの名がみえます。

又、大名同志でも招きあいが頻繁にあり、そのため大名自身も茶の湯の知識は必須でした。

会津藩の茶の湯は保科正之自身が石州流を学び、家臣を大和小泉に派遣して石州流を伝授させると共に、江戸藩邸では遠州流の山本道珍を茶堂として召し抱えました。この道珍が御薬園を補修しています。その後三代正容（まさかた）の時に藩士に石州流怡溪（いけい）派を学ばせました。

このように会津藩では遠州流と石州流怡溪派の茶の湯が主流で、千家流は少数派だったようです。

今、鶴ヶ城本丸の中には鱗閣という茶室がありますが、これは利休が切腹したのち、その息子の少庵を利休の弟子であった蒲生氏郷が会津で庇護していた間に、少庵がその建設に携わったといわれるものです。戊申の役で鶴ヶ城が落城した時、医科の森川善兵衛が貰い受け甲賀町の自邸に移築しておいたものです。

会津の漆器は蒲生時代に始まっていて、寛政年間には会津へ職人を招き蒔絵等の技術を習得させています。藩主用の茶道具を生産していたものと思われます。

本郷焼も蒲生氏郷時代に播州から連れてきた職人が瓦を焼いたのが始まりで、茶陶は保科正之が瀬戸の陶工を連れてきたのが始まりです。

このように茶道は藩主の必須教養であると同時に、その道具を作ることは藩の産業として大きな役割を果たしていたのです。

江戸時代の歴史に出てくる茶道の逸話としては、赤穂浪士の討ち入りがありません。

吉良上野介は当時の代表的な教養人であり茶の湯に通じていました。幕府の方針で隠居させられ本所に住んでいましたが、息子が藩主となっていた上杉藩に移る直前に友人を招いて茶事を開きました。その客の一人が江戸千家の家元、山田宗徧でした。そこに目をつけていた大高源吾が弟子入りしていて、その情報を掴んだのです。この茶事が開かれなかったら、あの日の討ち入りは無かったでしょう。当然、大高源吾も茶人ということですね。

以上のように、江戸時代は将軍家を始め大名が茶の湯の大スポンサーでした。また、大商人や地方の地主、酒造家、廻船問屋など武家と交流のある裕福な町人層も例外なく茶の湯を嗜んでいました。

それが明治維新でスポンサーとしての余力がなくなり一時茶道は冬の時代を迎えます。

復活するのは。日清日露戦争後です。この二つの戦争で大勢の軍人が亡くなりますが、その中には多くの士族が含まれていました。武士だった人たちです。明治政府は未亡人たちの救済策の一つとして、茶道家元達に女性に茶道を教える資格を与えるよう指導したのです。それ以前は女性は習うことはできても教えることは許されなかったのです。

武家の妻の大半は教養として茶の湯を学んでいたもので、このような対策が取れたのです。

この対策により一度にたくさんの女性の茶道講師が生まれまして、瞬く間に女性の茶人が増えていきました。また、女学校でも茶の湯は正式科目として採用されたことも拍車をかけることになりました。今では茶道は女性のものとして誤解されています。

大正から大東亜戦争までの間の茶の湯のプレーヤーは財界の重鎮達です。三井財閥の社長・益田鈍翁、電力事業の松永耳庵、東武鉄道の根津嘉一郎、荏原製作所の畠山即翁、生糸商の原三溪、東急電鉄の五島慶太などです。戦後その人たちの収集した茶道具・美術品は財団法人としての美術館に納まっています。三井記念美術館、根津美術館、畠山記念館、五島美術館などで、一部は国の博物館にも寄贈されています。

次に茶の湯に必要な伝統文化についてご説明します。

まず床の間にかける軸です。

これには禅語が多く使われます。茶道は中国に留学した禅僧がもたらしたもので、禅僧たちは佛に茶を供えるとともに自分も飲みました。茶禅一味と言い、茶を飲むことと禅の修行を一体のものとしてとらえているのです。

その次によく使われるのが和歌です。万葉集、古今集などにある和歌で、平安時代の歌人や天皇の自筆にお目にかかることもあります。それと利休や大名茶人の和歌、手紙なども使用されます。昨年秋に名古屋での茶会で掛けられていた軸は、伊達政宗が古田織部へあてた手紙でした。政宗の花押を見て感激しました。

軸を読むためには禅語と和歌（百人一首など）の勉強は必須です。

軸の後に花を入れます。この花は茶花といい、日本古来の野草が主でして、一般の花屋さんでは売っていません。里山を歩き採取することが多いです。茶道を始める迄は、菊、さくら、チューリップなどしか分かりませんでした。今は路傍の草花に目が行くようになりました。

次に茶室建築ですね。

数寄屋建築といわれるもので、最初は町中に田舎家を演出するもので、「市中の山居」と言われました。柱材、壁材、天井材などなど、茶室の趣向や格に応じて素材が決められています。

庭は露地と言われ、樹木と石が配されますが、花の咲くものは使用されません。京都のお寺の多くにこの茶庭（露地）が造られています。

次に道具としての漆器、陶磁器、木工芸品、金工芸品、古代布地等があります。それらの中には古代中国やシルクロードから渡って来たもの、アジア産品、ヨーロッパ製品など海外のものが沢山あります。国宝になっている窯変天目茶碗や青磁下蕪花入は12-13世紀南宋のもの、同じく国宝の大井戸茶碗・喜左衛門井戸は16世紀李氏朝鮮時代のもの、有名な唐物茶入れといわれるのも南宋時代のもので、これらのものは日本に輸入されてから茶道具として使われるようになりました。現在、この上野の東京国立博物館では「茶の湯展」が開かれて

おり今述べた道具のほとんどが陳列されています。

このほか、能や香、着物、料理、菓子の知識も必要とされます。

炭や灰にも細かい決まりがあり、季節や道具によって仕様が変わります。

灰はクヌギ灰が上等とされ毎夏の土用のころに水を入れ灰汁を何度も抜き、乾かしてから番茶などを煮出した熱湯をまぶして色と栄養を加え、乾燥後に細かく振るいそれを壺に入れ三カ月ほど寝かせます。それが炉の灰となります。

夏に使う風炉の灰は、炉の灰をすり鉢で擦って微粒子状にしたものです。

我が家の灰は母が使っていたものを受け継いでいますが、まだ5-6年でしょう。家元の灰は400年以上のものです。茶の家で火事にあった場合には灰だけは持ち出せと言われていました。

一席の茶会や茶事を行うには今述べたものの知識を総動員して企画します。

その亭主の喜びは、その企画をお客に推理して貰い、こちらの意図を読んでもらうことです。これは真剣勝負ともいえます。

例えば、五月の茶席を企画するとき、伊勢物語の東下りをテーマとしたとしましょう。

- ①待合席の床の間に馬上の平安貴族が遠くの山を眺めている絵の軸を掛けます
とそれは伊勢物語に登場する「信濃なる浅間の嶽にたつ煙　をちこち人の見
やはとがめぬ」の歌を表すこととなります
- ②茶碗には三人の貴族が水べりに座って歌を詠んでいる絵がある
これも物語にでてくる有名な和歌を表現しています
「から衣きつつなれにし　つましあれば　はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」
- ③主菓子は都鳥の形で同様に、
「なにし負はば　いざ言問わむ　都鳥　我が思ふ人はありやなしやと」
の和歌の情景です

こうして客は伊勢物語が主題になっていることを道具組から読み解きます。また、亭主にその道具に因んだ和歌を詠んで貰うことをお願いします。このような会話が出来れば亭主と客は一体となって茶を楽しめます。

お茶を始めることによって、日本各地の美術館や博物館を訪ねることが楽しくなり、里山を歩けば山野草に目が留まり、お寺に詣れば庭や茶室に感激し、料理店に行けば食器や季節の具材に心を奪われ、茶会では歴史上の人物が使った茶碗で茶を飲むこともあります。

皆様にもぜひこの喜びを分かち合っていたきたいと心より願っております。

ご清聴、有難うございました。